

平成31年度 北海道大学大学院  
文学院修士課程入学試験（前期）

試験区分	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 一般入試</li><li>■ 外国人留学生特別入試</li><li>□ 社会人特別入試（後期のみ）</li></ul>
試験科目名	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 専門試験（ 日本古典文化論 ）</li><li>□ 共通外国語（ ）</li></ul>
出題の意図	<p>問題は計三問で、本研究室での学修に不可欠な能力・知識を多角的に量ることを意図したものである。</p> <p>問題一は、主として日本古典文学史に関わる学術的文章の読解力・批評力・論述能力を、問題二は、古典の文章の基礎的解釈力とあわせて、変体仮名の理解度をも同時に試す問題。また、問題三は、日本古典文学を研究する上で必要となる漢文の解釈力をみる問題である。</p>

平成31年度  
北海道大学大学院文学院修士課程入学試験問題（前期）  
（専門試験） 日本古典文化論 全4枚のうち1枚目

この試験では、試験問題 4枚、解答用紙 3枚を配付する。  
問題は三題あり、解答は問題一・二・三についてそれぞれ別の解答用紙を用いること。

---

## 問題一

次の文章は中村真一郎『王朝文学論』の一節である。読んで設問に答えよ。

- \* 問題本文は著作権法上の理由からこのホームページに掲載することはできませんので、下記の出典箇所を参照するか、文学研究科教務担当の窓口で閲覧してください。

中村真一郎著『王朝文学論』（新潮文庫 青12 昭和46年6月発行）15頁～18頁

問一 右の文章の要旨をまとめよ。

問二 右の文章の全体、あるいは部分に着目し、各自の興味に引き付けつつ自由に論述せよ。

平成31年度（前期）

日本古典文化論

全4枚のうち2枚目

## 問題二

次の文章は『堤中納言物語』所収の一篇『ほとほとの懸想』の一部である。葵祭の時期に知り合つてすぐに親しい仲となった頭中將に仕える小舎人童と某家の女童だったが、その後女童の方が遠く下京にある故式部卿の宮邸に奉公先を交えたため、二人はそれまでのように頻繁に逢つことができなくなってしまったのだ。読んで後の設問に答えよ。

ふりまじりぬれぬし 式部へ  
 るまりぬれぬし 中よみぬらひけり

宮などよく隠れたまひにしかば、心細く思ひなげきつつ、下わたりには人少なにて過したまふ。上は、宮のうせたまひける折、イさま交へたまひにけり。姫君の御かたち、例のことといひながら、なべてならずおひまさりたまへば、「いかにせまし。内裏などにおほしきだめたりしを、今はかひなく」などおほしなげくし。

この童、来つて見ることにたのもしげなく、宮の内もまひしくすげなるけしきを見て、語らふ。「まろが君を、この宮に遇はしたまつらばや。またおだめたる方もなくておはしますに、いかによからむ。ほどはるかになれば、思ふままにも参らねば、おろかなるともおほすらむ。また、いかにとうしろめたき心地もそくて、ままもまやすげなきを」といくば、「さらに今は、さやうのこともおほしのだまほせずとこそ聞けば」といふ。「御かたちめでたくおはしますらむや。いみじき御子たちなりとも、口あかぬとこそおはしまむは、いとくちをしからむ」といけば、「あなあさまし。いかでか見だてまつらむ。人々のたまふは、『ハよろづむつかしきも、御前にだに参れば、なくさみぬべし』とこそたまへ」と語らひて、明けぬれば往ぬ。

注 上 — 故式部卿の宮の北の方

問一 変体仮名の部分を翻字せよ。

問二 傍線部イ・ロ・ハを現代語訳せよ。

問三 波線部 a・b・c・dの主語を答えよ。

問四 二重傍線部の願望に込められた意図を複数の点に分けてまとめよ。

## 問題三

次の文章は『貞観政要』の一節である。読んで設問に答えよ。

貞観十一年、著作佐郎鄧崇、<sup>A</sup>表請編次太宗文章為集。太宗謂曰、朕若制事出令、<sup>B</sup>有益於人者、史則書之、足為不朽。若事不師古、乱政害物、雖有詞藻、<sup>C</sup>終貽後代笑。非所須也。祇如梁武帝父子、及陳後主・隋煬帝、亦大有文集。而所為多不法、宗社皆須與覆滅。凡為人主惟在德化。何必要事文章耶。<sup>D</sup>竟不許。

注 著作佐郎 国史編纂に携わる官。

宗社 国家のこと。

問一 傍線部 A・C を平仮名のみ書き下し文に改めよ。

問二 傍線部 B とはどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部 D とあるが、太宗の「文章」についての考えを説明せよ。